

7月7日の記憶、後世に

千葉空襲集会

66年前の惨状 体験者語る



集会には約100人が参加し、千葉空襲で亡くなった人に黙とうをささげた＝7日、中央区

66年前にあった千葉空襲の体験者が当時の状況を語る集会が7日、中央区の市文化センターで開かれた。2度目の大規模な空襲があった七夕の日に合わせて開かれ、当時10～20代だった4人が県都の惨状を語り、約100人の参加者とともに「再び戦争は起こさせない」と誓った。

市などによると、1945年6月10日と7月7日、千葉市は米軍による空襲に遭い中心市街地の約7割に当たる231軒が焼け野原になった。死傷者は1595人とされているが、正確な犠牲者数は判明していない。

「亥鼻の山から見た(市中心部は)一面焼け野原だった」と山中さん。中村さんも6月10日、現在のJR千葉駅周辺にあった鉄道施設近くで空襲に遭い「爆風で吹き飛ばされた」。施設内にいた人が亡くなったという。

集会は「千葉市空襲と戦争を語る会」と「ちば・戦争体験を伝える会」が主催。堤信一さん(82)、鶴本富士

語る会は、千葉空襲の犠牲者の慰霊碑建立に向け、亡くなった人の名簿作成を行っており、集会でも参加者に協力を呼び掛けた。7月7日の空襲後、堤さんは中央区内の自宅近くにあった寺院で、兵隊が20人ぐらの性別不明の焼死体をトラックに積んで運ぶのを目撃した。あの人たちがどうなったのか今も気になっているという堤さんは「碑を建てれば遺族が名乗り出やすくなり、死亡者の確認作業が早くなるのでは」と話していた。